

調査概要と総括報告の位置づけ

労働調査協議会では、2011年から2012年にかけて、「今“つながり”に求められていること～関係性の現状と課題～」をテーマとして調査研究事業に取り組み、共同調査「人と人のつながりに関するアンケート」を実施した。実施概要は次の通りである。

調査の実施概要

実施時期は2012年2月～2012年7月。参加組合は、電機連合、基幹労連、J P 労組、N T T 労組、J S D（調査当時）、私鉄総連、自治労、日教組、全印刷、全農林の10単産・単組。調査票の総配布数は14,900枚、有効に回収されたのは12,653枚である。

データ構成は、1単産・単組につき800件を基本とし、有効回収がそれを上回る場合は800件を無作為抽出し、下回る場合には有効回収のすべてを組み入れた。その結果、共同調査の全体データのサンプルは6,744件となった。

調査結果の概要はすでに『労働調査』2012年9月号にて発表しているが、本号では、労働調査協議会事務局の調査研究員が分担し、調査結果について詳細な分析を行っている。

1. 本調査の目的と概要のポイント

本調査では、“つながり”の現代社会における希薄化という課題認識に立脚し、職場で働く人びとが形成している“つながり”を研究対象として取り上げた。そして、職場、地域、家族などの人びとの生活の場における“つながり”の現状を領域ごとに把握するとともに、“つながり”についての意識や希望するあり方、さらには、“つながり”の形成を妨げている要因を明らかにすることを試みた。

このような問題意識に基づき、概要においては職場で働く人びとの“つながり”の特徴点として次の点を明らかにした。

- ①東日本大震災を契機として“つながり”の価値が再認識されていること。
- ②現状よりも深い“つながり”の形成を望んでいる人が多いこと。
- ③“つながり”形成の妨げとしては、時間の不足のみならず、機会の不足も意識されていること。
- ④“つながり”の充実という点では、職場や地域など既存の関係の深化が望まれているばかりでなく、ボランティアやNPO団体など、新しい社会的活動への参加意欲も高いこと。
- ⑤“つながり”の形成は、人びとの生活をより豊かで充実したものにするだけでなく、地域における防災などセーフティーネットとしても役立ちうる資源であること。

そして、これらの調査から見出された結果をもとに、労働組合にとっても、従来から取り組まれているワーク・ライフ・バランスの改善のための活動に加え、“つながり”のきっかけ作りなど機会を提供するための取り組みの充実も重要であることを提起してきた。

2. 総括報告における3つのアプローチ

概要では、職場や地域など生活の各領域における“つながり”について、それぞれの領域における全体像を描き出すことに主眼をおいていた。総括報告では大別すると次の3つのアプローチから“つながり”についての検討を深めている。

(1) 領域横断的にみた“つながり”の検討

人びとの“つながり”について、生活の領域を個別断片的に捉えるのではなく、個々人が形成する“つながり”を領域横断的に把握することを試みた。

総括報告では、職場と地域の両領域について深い“つながり”を望み実現している人、浅い“つながり”を望み実現している人の両者を比較することを通し、回答者のなかで一定数を占めている浅い“つながり”を望み実現している人の特徴を明らかにするとともに（第1章）、すべての領域を取り上げ、領域横断的に“つながり”の現状や評価の関連性について検討を行った（第2章）。

(2) 職場における“つながり”のクローズアップ

職場における“つながり”については、概要において既に全体的な特徴点を発表している。総括報告では、概要で紹介した全体像に基づきながら、概要の時点で示されている若年層における人間関係の充実度や満足度の高さの背景を検討するとともに（第3章）、職場における“つながり”形成の担い手である組合役員層に注目し、その“つながり”の現状と、それを踏まえた労働組合における役員育成上の課題を指摘している（第4章）。

(3) ライフステージごとにみた“つながり”の課題

調査対象の特定の層（若年層、中高年層、女性など）に注目して“つながり”を検討した。既に、概要において指摘しているが、人びとが保持している“つながり”は、全体的にはライフステージの進行にともなって移り変わっていく特徴がある。

したがって、ライフステージごとに“つながり”をみていくと、全体像とは違った特徴点も析出されることになる。この観点からは、退職というライフステージの転換点を控えた60代男性における“つながり”の課題（第5章）、地域における“つながり”を保持している働く母親の現状（第6章）に注目している。

ただし、晩婚化、非婚化の結果、従来のライフステージには揺らぎが生じていることは指摘されて久しい。“つながり”がライフステージと密接に関わりあっているとすれば、ライフステージにおける揺らぎは、人びとが形成する“つながり”を動揺させ、場合によっては“つながり”の欠如に帰結する危険性も内包している。総括報告では、晩婚化、非婚化の進行の結果、拡大している独身層に焦点を当て、40～50代の一人暮らし層における“つながり”（第7章）、一人暮らしと地域における防災の課題（第8章）、一人暮らし層により多くみられるインターネットを通じて形成される“つながり”の特徴（第9章）を取り上げている。

各章の要旨

第1章 つながりの深さの背景とそれがもたらす影響

人間関係の現実と理想が一致している人たちに着目し、その中で人間関係の深さの違いがどこから来るのか、そうした違いがどのような影響を及ぼしているのかを探っている。領域として職場と地域を取り上げ、職場においては仕事だけの関係、地域では挨拶だけのつきあいといった、現状も理想も浅い関係の人たちは、職場の関係においては中高年層、地域の関係では若年層に多いことが明らかになった。また、この浅い関係の人たちは職場や地域への帰属意識が低く、各種団体への参加率が低いなどコミットの度合いが少ないことが示されている。

第2章 職場・地域・家族など人間関係領域の相互関係について

職場・地域など本調査で取り上げた5領域における人間関係の深さは相互に独立的であり、人間関係の深さと生活全体の満足度との関連性も乏しい。しかし、領域毎の人間関係満足度は相互に関連性があり、人間関係への満足度と生活全体の満足度にはかなり強い関連性がある。このことから、特定領域のみで深い人間関係を築くだけでは生活全体の満足度にはつながらないものの、“特定の領域での深い人間関係”は“その領域における人間関係満足度”をもたらし、結果として、“全体としての人間関係満足度”、“生活全体の満足度”へと帰結していくとも考えられる。生活満足度を高めるためには、各領域の人間関係をまんべんなく深くしていくアプローチ、職場あるいは家族を中心に特定の領域における人間関係を深めていくアプローチのいずれもが成立するということを指摘する。

第3章 若年層の職場のつながりについての一考察

職場の人間関係に対する満足度は全般的に高く、なかでも若年層で顕著である。さらに、若年層の間では職場の上司や同僚と個人的なつながりを保持している人が中高年層に比べて多い。第3章では、若年層（組合役員を除く）に焦点をあて、こうした満足度の高さやつながりの充実の背景を考察している。背景にはつながり形成に対する前向きな意識の存在が見出された一方、中高年層では職場の組織形態がつながりの阻害要因となりうることが示された。また、年齢を問わず人との深い関係なしに人間関係に満足という層も少なくない。“直接仕事に関係する範囲”の関係に満足している層といえる。ただし、同層の若年層では深いつながりへの欲求が相対的に弱いことも示されている。

第4章 組合役員と職場のネットワーク

組合役員の理想とする「職場の上司以外の人」との関係は、交遊志向や相互扶助志向が多くを占めるが、仕事限定志向も2割弱と少なくない。仕事限定志向の組合役員は、職場の人間関係への関心は希薄で、労働組合による「生活についての相談活動」、「ボランティア活動・社会的貢献活動」など組合員のセーフティネットや社会的なつながりを求める活動への消極姿勢も目立つ。組合役員が職場や生活上の悩みをすくい上げ、労働組合を通して問題解決を果たす役割を担っている点からすると課題が少なくない。役員選出にあたっては、人への関心や、つながりへの目配りの利いた人材の発掘と、役員就任後の“人間関係形成能力”の開発や育成が求められているといえるだろう。

加えて、相互扶助志向や交遊志向を理想とする組合役員が、現在そのような関係を取り結べていない実態も明らかになっている。阻害要因には、何よりも「仕事が忙しく時間がない」ことがあげられており、多忙な仕事と組合業務を兼務する非専従役員に“ゆとり”の喪失が広がっている。魅力ある運動の展開のためにも、組合役員のワーク・ライフ・バランス確保が課題であることも指摘する。

第5章 60代男性における孤独と絆

定年後の60代前半に働く男性のつながりを検討している。定年後の職場では、仕事以外の交流が減少するなど、職場でのつながりは希薄になっている。しかし、新たに期待される地域とのつながりも仕事が忙しい、休みが合わないなど希望通りには実現していない。また、学校時代の友人との関係も希薄になる一方で、趣味の仲間とのつながりも相談し助け合うつながりまでに至るケースは少ない。このため、妻や子どもなど家族への期待が大きくなる、いわば“家族回帰”現象が起きているといえる。定年後に幅広いつながりを図るには、職場における仕事以外のつながりを図る工夫や、職業生活引退後のつながりの確保、ワーク・ライフ・バランスの実現などの環境整備が求められている。

第6章 働く母親の“つながり” — 「地域」を中心に —

子どものいる層で地域との関わり合いが比較的強いことは男女に共通しているが、とりわけ母親の場合には「PTA・父母会・子ども会」への参加が7割と4割の父親を大きく上回り、子育てが地域における“つながり”形成の主要なきっかけとなっている。しかし、母親の間でも、地域における現在のかかわり方や今後の意向は様々である。母親たちが自ら関係性を作っているというより、子育て等において求められる役割から関係性を作らざるをえないという側面も否定できない。仕事に加え、家事・育児の比重が高いことが“つながり”構築の難しさを生じさせていることもうかがえる。

第7章 40～50代にみる“一人暮らし”のつながり

本調査の対象者は40～50代が半数強を占め、その中では単身者も少なくない。第7章では、この年齢層の一人暮らし層に焦点をあて、地域社会とのつながりについて検討を加えている。その結果、①大都市圏の一人暮らし層は地域に対して無関心で、②「相談したり、助け合える人はない」は一人暮らし男性で少なくない。また、③大都市圏の一人暮らし層では地域とのつながりを持たないケースが多い上、④つながりの阻害要因としては機会や時間の不足の他に、さらに、男性ではつきあいが「苦手」や「面倒」も少なくない、ということが明らかになっている。

第8章 地域における防災

東日本大震災は地域での協力関係の大切さを改めて認識させる契機でもあったが、現実の協力関係の有無では、特に独身一人暮らしの間で「ない」という認識が目立つ。ただし、同層でも地域に積極的に参加している組合員もおり、その多くは協力関係が「ある」としている。地域参加が地域防災において重要であることを示した結果であるが、現状では地域コミュニティに参加しづらいと感じている人が少なからず存在している。地域での防災力を高めるためには、個々の意識に働きかけて地域参加を促すだけでなく、多様な状況にある人びとを包摂できる地域コミュニティを形成していく方策を模索する必要もあると指摘する。

第9章 インターネットとつながり

スマートフォンの急速な普及やSNSの利用拡大により、インターネットを通じたつながりは無視できないものとなっている。本調査でも回答者の1割はインターネットで知り合った人とのつながりを保持している。これらの人びとをVirtual Friendship Holder層（以下VFH層）と定義すると、若年の独身者に多くみられること、つながりに価値おおく意識・感覚、あるいは自分志向的な心性により基づく傾向があること、趣味等のサークル、ボランティアなど各種団体への参加意欲も高いといった特徴がみられる。第9章では、VFH層は自ら選んだライフスタイルを実現するための一ツールとしてインターネットを活用している側面が強ことが明らかになっている。